Legacy
Illustrator
まるまい
Composer
Kashiwade
The poetry with sigh of meteor
流星詠嘆の詩
II

Legacy
Illustrator
まるまい
Composer
Kashiwade
The poetry
with sigh of meteor
流星詠嘆の詩
II

Contents

夜明け
夜明け II
ファイアトリック
風雪ながれ夜
風雪ながれ夜 II
風雪ながれ夜 III
雷撃と半剣
聖女と桔梗の騎士
運命的始まり
空を飛ぶ鷹
迫る暗流
著作権ページ

WorldMap

Libération

――その流れ星を手に入れることで、美しい夢がすべて叶うとしたら、何を願う？
……それとも、そのために奪い合う決意をする？

火のような赤い流れ星が夜空を翔け抜け、闇を切り裂き、果てしなく空に広がっていった。ここには輝く星座も、遠い銀河も存在せず、ただ2つの明るい月が天空に高くかかっていた。
なぜ空は無数の流れ星をこの世界に降り注ぐのだろうか？　人々はかつて、それは神々の啓示だと言いた。
災厄が迫るたび、それらは紅い光を放って降り注ぎ、流れ星でありながら流れ星でなく、まるで嵐の中の雷光のようだった。
ある者はこれらの空からの流れ星を手に入れれば世界を支配できると言いた。
ある者は空からの流れ星が愛する人を生き返させると言いた。
そして賢者たちは、空からの流れ星が永遠の繁栄と平和をもたらすと語った。
しかし、それがどこから来たのか、一体何なのかは誰も知らない。

「流れ星……おい！ほら！流れ星だ！」少年は弧を描いて一瞬に消える光を指さし、興奮して叫びながら飛び跳ねた。
流れ星が夜空を駆け抜け、まるで少年の呼びかけに応えるかのように、真っ赤に輝きを放ってきらめいた。
少年は内心の興奮を抑えきれず、背後の少女振り返って見つめ、思わず声を上げた。「本に書かれている通りだ！120年、流れ星が降る周期は本当に120年だ！」
「ねえ、グウィニスさん、見てください！僕は正しいですよね？」

「そうよ、あなたの言う通り。前回から120年も経ったな……」少女は手に持つ紅茶を軽く啜り、彼と一緒に草地に座って夜空を見上げた。「これが伝説の流れ星なの？」

少女は純白のワンピースドレスを着ており、輝く金色の長い髪が腰に垂れ下がっていた。騎士学校の休暇中、時々この村に戻ってきて、彼と一緒に過ごした。彼は数少ない友人の一人であるため、少女は彼と過ごす時間をとても楽しんでいた。平日の抑圧的な生活から逃れられるのは今だけだった。

「はい、伝説の流れ星です」少年は落ちてくる深紅の流れ星を見上げ、その景色をたびたび称賛した。「流れ星たちは輝くルビーで、神からの贈り物なんだと言われています……人々を狂わせるけど、同時にすべての生き物に幸せをもたらします」。

「同時に災厄と不幸も招くわ」少女はカップカバーを軽く閉じ、淡々とした口調で少年に答えた。「だれもこのような貴重な機会を逃すわけにはいかないと思うからこそ、争奪と戦争、混乱と戦火が巻き起こることだ」。

得難い奇観が目の前にあっても、彼女の表情には一切の喜びが感じらなかった。

細長いまつ毛は下がり、その眼差しは暗く静かで、長い金色の髪が地に垂れ、深く優雅なため息と完璧に調和していた。

「今夜の景色は一生忘れない」少女は穏やかな口調で言い、彼に礼儀正しい微笑みを向けた。「招待してくれて、ありがとう、ノエル」。

「いいえ、とんでもないです！光栄です、グウィニスさん。次回もぜひお越しください。きっともっと素敵で、忘れられない誕生日プレゼントを必ず用意します！」ノエルという少年は輝く笑顔で言い、丁寧に両手を差し伸べ、一緒に夜空の果てに向かって行き、最後のワルツを楽しくと少女を誘った。「それで、どうか……どうか……」

ところが、再び振り返ると、グウィニスの姿はどこにもなかった。
流れ星は依然として真っ赤で、夜空は漆黒だったが、そこには少女の姿はなく、代わりに馬に乗った漆黒の騎士だった。
男は片手に綱を握り、もう一方の手に特異な形状の大きな斧を持ち上げ、粗野な腕には大小のひどい傷跡に覆われ、後ろには闇の軍隊を率いて緩やかに近づいてきた。
「時間だ、坊や」男は馬の上から少年をちらっと見て、ゆっくりと息を吐き出した。「もう行く時間だぞ、ここから出て行け」。
少年はこの男の伝説を聞いたことがある。
男は刀傷の跡だらけの漆黒の鎧を着ており、それらの傷痕は彼が数え切れない戦闘を経て得た栄誉の証だった。風になびく黒いマントには火の長剣の紋章が刺繍され、彼の出自を物語っていた。そして、肩にかけられたその独特の大斧は、絶対的な力を崇める象徴だった。
そう、その札付きの暗黒の戦士、彼は狂風の中のリーゼガーベアだった。
彼の出現は何か良い兆しではなく、なぜなら、この軍団は破壊と死をもたらすだけであり、それが少年を不安と恐怖に陥れた。
「出て行け？　ここは僕を育ててくれた村だ。お前たち悪魔どもがここに何しに来たのか？」彼は叫んだが、その行為が無駄だと自覚していた。心の中では無駄だと分かっているも、彼は手を乱雑に振りながら前方に向かって叫んだ。
「何をしている？　お前はどれくらいここに留まるんだい？」漆黒の戦士は馬を前に進めながら、手に持っている鋭利な斧を高く掲げ、彼の首を狙った。「忘れたのか？　お前にはもっと大事なことがある。その空からの流れ星を見つけ、過去を取り戻すまで、長い旅を続けなければならないんだ」。

戦士は手に持っている巨大な斧を軽く振り、少年に前に進むよう示した。「ここにはお前の家も村もない。この光景は単なる夢と砕けた記憶の結びつきで、本当の過去ではなく、また単なる夢でもない」。

「さあ、坊や……まだ何をためらっている？」戦士は再び彼に手を振った。

「いいえ」戦士の予想と違って、少年は頭を振り、二歩後ずさりした。「これはあまりにも奇妙すぎる。首を斬られるつもりはない。僕はお前の命令に従うことではなく、夢から抜け出す他の方法を見つける」。

「それは本当に残念だ、少年」少年の答えを聞いて、戦士の表情は急速に変わった。反応を待つ間もなく、軍馬は少年に向かって狂ったように突進し、高く肩に掲げた戦斧と共に嘶いた。

もちろん、少年はただ座って死を待つつもりはなかった。彼は振り返ることなく猛然と走り、風が耳元に響き、足元の草を飛ばしながら、風に乗って滑るように速く走って、誰も彼の速さに追いつけならなかった。この瞬間、彼は自分が漆黒の死神から逃れられるかもしれないという奇妙な幻想を抱いた。

それが、少年はすぐにその考えがどれほど甘いものであるかに気づいた――追いかける敵が消えたわけではなく、最初の漆黒の戦士はずっと前に姿を消したが、黒いマントをまとった謎の少女が彼の代わりになっていた。

「え？　本当にそう思うの？」少女は素早くノエルの横に追いつき、手が巧みに彼女の腰を触り、明るい銀の短剣を引き抜き、挑発的に微笑みかけながら尋ねた。「本当に自分がスムーズに逃げ切れると思っているの？坊や？」

「ちくしょう、君一体誰だ？　何を企んでいる？」少年は歯を食いしばって足を速めようとした。だけど、いくら頑張っても、彼女より速く走ることはできなかった。「もうついてこないでくれ、君の助けはいらない、自分で夢から脱出できる！」

「いいえ、できないのよ」少女はきっぱりと言い切り、怪しい笑みが浮かべ、次に一瞬で跳び上がり、両腕を猫が小鳥を捉えるように掴み、一気に彼を地面に制圧した。「なぜなら、夢から脱出する方法はただ一つ……私

を倒すことなの」。

「ハハー、君を倒す？　君は誰なんだ？」

「ふーん」と少女は冷たく鼻を鳴らして、少年の首にさらっと短剣を差し掛けた。「私は誰？　私は君の故郷を焼き尽くし、すべてを奪い、家族を殺した最も邪悪な存在なの」。

「はぁ……何言ってるのか分からない」少年は大きく息を吸いながら必死にもがき、背中に跨った少女から逃げようとした。「僕の故郷はここにあって、友達も家族もここにいるんだ！」

「いいえ、彼らはもういない。君もよく知っているはず」少女は自慢げな表情で必死に抵抗する少年を見下ろし、首を横振って溜め息をつきた。「誰も運命に逆らうことはできない。ここでも例外ではないの」。

「存在しないって？　定められた運命？……ハハー君が言っていることが全て本当だとしても、僕は屈しない。どんなくだらない運命であろうと、君たち悪魔がどんなに必死に追いかけるとしても、僕は最後まで抵抗し続ける！」少年は断固とした表情で言い切り、恐れずに、はっきりと力強く口から出る一言一句が明瞭で、一切の勝利の機会を持っていないにもかかわらず、慈悲を乞う様子はまったくなかった。

ノエルの反応があまりにも面白かったのか、あるいは気まぐれからなのか、少女は少し興味を示し、静かに口角を上げた。「ふーん、面白いひとわ。ねぇ、名前を教えて」。

「へへ……知りたいか？」少年は彼女の背後を向け、目に狂気の光が輝いた。突然、相手の怠惰に乗じて彼女が手を離した隙に、ノエルは激しく後ろの縛りを解こうともがき、目の前にいる白く柔らかい掌を強く噛みつき、少女を痛がらせ、高い叫び声を上げ、苦痛の表情で武器を手から離させた。「よく聞け、ノエル、パルトロウ家のノエル、ノエル・パルトロウが僕の名前だ！」

少女はまるで驚いた野良猫のように、怯えた表情でノエルから飛び跳ね、血まみれの掌を怒りに握り締めて、そして煙のように瞬時にノエルの視界から消え去った。それから、すべては再び静寂に戻り、グウィニス、闇の戦士だけでなく、少女の姿も消え去った。少年の頭上の空は再び赤く輝き、まるで猛烈な炎のようで、赤い流れ星と一緒に落ちてきた。

「そうか？　あなたも運命に抗うつもり？　空からの流れ星に抗う悲劇的な運命……」ノエルは息を呑み、胸を張って直立し、疲れて赤い空を眺めた。その耳に、少女の声が突如として響き渡り、見知らぬが懐かしい、遠くても澄んだ声だった。「さあ、自分の意志に従って、懸命に生きていけ。その無邪気さと無知に別れを告げて、虹の向こう側を歩いて行て。今日のすべてを覚えておけ、私を憎んで、私の姿を追い求めて、復讐せよ」。

「おい！何を言いたいの？　復讐？　虹の向こう側？　その話はまったく意味がない！」

血のように赤い炎は依然として燃え続け、夜空を貪欲に飲み込んでいた。

流れ星が降り続け、南風が吹き続け、少年は目を開けるのが難しくなった。彼の瞼はますます重くなり、視界も徐々にぼやけていき、最後には一筋の光の輝きさえ見ることができなくなった。

「もう時間がないみたい。よく聞いて、一度だけ言うね」と、少年は夢から覚める前に少女の最後のささやき声を聞いた。「ノエル、導きの声をよく聞いてください。伝説が君に道を示してくれる、そして……私たちは再び出会うでしょう」。

「……私の戦士」

最後、闇がついに少年を飲み込んだ。

夢は彼の足場を奪い、やがて少年の叫び声も聞こえなくなるまで、容赦なく彼を底知れぬ暗黒の淵に引きずり込んだ。

「――はぁ！はぁ、はぁ！夢だ……」ノエルは悪夢から逃れ、恐怖に満ちた顔で座り上がって、大きな息をつきた。

汗が彼のシャツを濡らし、大きな玉のような汗が額の前の黒い髪に垂れ、薄い灰色の毛布に汗のシミが点々と広がって、まるで本当の追跡の冒険を終えたかのようだった。

「……夢か、よかった、ただの夢だったんだな」彼はしばらく両目をこすり、呼吸が安定するのを待ってから、それからゆっくりと毛布から抜け出し、暖かく燃え盛るキャンプファイヤーに歩み寄った。

少年はキャンプ場を見回した――ホルンは相変わらず涎を垂らし、独特の奇妙なポーズでぐっすり眠っていて、時折寝言で何かを呟いていた。たとえば、「くそったれのデスティニー、お前のおしゃべりには我慢できない。黙ってくれないの？」とか、「グウィネフ、俺の弓矢をどこに隠したんだ？ 俺の短弓はどこだ？」とか。

もちろん、この「良い夢」が進むにつれて、ホルンの肩にかかる茶色の髪の毛もいくらかの白いよだれを浴びてしまい、再び身なりを整える必要があるだろう。高貴で清潔好きなレンジャーであると自慢しているから。

キャンプファイヤーはパチパチと跳ね続けて、時には沈み、時には踊るように燃えさかり、時には勢いを増して、グウィネフの白い横顔に迫った。少女は肩にかかる茶赤いショートヘアをしており、快適で実用のためか、普段は後ろ髪をポニーテールにまとめ、賢く洗練された姿をしている。

しかし、今の彼女はただおとなしい少女で、いつものようにデスティニーの毛布にくるまり、デスティニーにぴったりと寄りかかり、彼女の腕の中でぐっすり眠っていた。他の人から見れば、彼女たちは祖母と孫のように見える――血縁関係がないにもかかわらず。

ノエルは寝ている可愛い少女を一瞥し、静かにキャンプ場の外の渓谷に向かって歩いていた。この悪夢はあまりにもリアルで重すぎた。頭がもうすっきりしたから、再び眠ることができなくて、おそらく小川で顔を洗う方が良い選択かもしらないだ。

「伝説があなたに道を示すってなんだ？」

首を横に振った。

もうだめだ、一体何なんだよ。

ただの悪夢であり、夢の本質はセンスも論理もないもので、その合理性を考える必要もないだ。

「おっ、目が覚めた？」小川の近くに停また馬車のそばに、夜回りの傭兵が立っていた。彼は坊主頭で眉毛がなく、いくぶん親しみやすい顔つきのブリエンだった。

彼は馬車の後ろに両手で寄りかかり、驚いたように目を丸くしていた。「いつも一番寝坊をする奴が、今日は誰よりも早く起きているんだって、どうした？」

ここでは、数々の戦闘を経験し、最も経験豊富なブリエンがリーダーだ。少なくとも、今のところ、キャンプ内の全ての傭兵は、最高指導者が到着するまで彼の命令に従わなければならない。

「いいえ、単に悪夢を見ただけです。くそ悪夢だったんです」ノエルは苦笑いして小川に歩み寄り、渓流から一掬いの冷たい水を掬い上げた。

山中の渓水は痛いほど冷たく、少年に現実にいることをはっきり思い知らせた。

彼は水中に頭を突っ込み、「ハハー」と頭を上げ、髪についた水滴をしっかり振り払った。

「おい、これ」ノエルはタオルを受け取り、迅速に髪を乾かし、気持ちよさそうに頭を振った。

「ブリエン兄さん」ノエルは頬を拭きながら、中年男性に向かって歩み寄った――彼はゆったりとパイプをくわえて立っており、時折、遠くないところにあって、消えていない明かりを見上げていた。「どうしたの？　このパイプを吸うつもりなら、断るぞ」。

「いや、そんなことはないです」ノエルは軽快にタオルを絞り、つま先立ちで彼の坊主頭を軽く叩いてつぶやいた。「単に気になるだけど、どうして兄さんの頭はいつもそんなにつるつるしていますか」。

「バカ、それは俺のスタイルだぞ」ブリエンは不機嫌そうに彼を睨みつけ、すぐに少年の耳をつかんで、タオルを馬車に投げ飛ばした。「今日はお前が一番早く起きたから、後でまだ寝ている怠け者たちを起こすのを忘れずに、できるだけ早くフォスター教会へ向かう準備を整えさせてくれ！」

「ああ、ああっ！はい、はい、ブリエン様、耳が引き裂かれそうでしたよ！」ノエルは痛みに耐えながら誇張した表情で耳を押さえ、彼と一緒に、鶏の鳴き声の聞こえる山の村を振り返した。そして、一日の始まり――眩しい金色の朝日が雲と霧と共に散り、薄暗い夜空を追い払い、再びこの大地を照らした。

ブリエンは胸の前で手を組み、口にくわえたパイプを深く吸い込み、目を細めて眩い金色の朝日を眺めて、白い煙を吐き出した。「バカだな、長い見張りの任務が終わるたび、一番楽しみにしているのがこの瞬間だ」。

「え？　どうしてですか」ノエルは困惑した表情で見た。「朝日の光が兄さんの坊主頭をより魅力的に見せるんですか」。

ブリエンは不機嫌そうの表情で白眼を向いて少年をじろりと見て、そして、パイプを上げて軽く二度叩き、歪んだ笑顔で首を横に振った。「ノエル、時々、お前の頭が誰かにぶつかって壊されたのではないかと本気で思うんだ」。

「え？」

「太陽が再び大地を照らすたび、俺たちが流れ星に一歩近づいたということだ」ブリエンは手を振り、前方の長い馬車に向かってまっすぐ歩いた。「おそらく、俺たちの願いがもうすぐ叶うかもしれないんだよ」。

「俺たちの願い……そうですね」朝光が彼のハンサムな顔に降り注ぎ、少年は目を細めざるを得ず、指で額を覆い、飛び去った灰鷹を指の隙間から見つめた。

灰鷹は両翼を広げて、高く飛んでいった。

彼は天空へと上昇し、ますます小さく見える渓澗の小川を見下ろして、見渡す限り白い山脈と森が高く聳え立ち、さらに遠くに賑やかな町が広がっていた。
空を舞う灰鷹は輝く太陽に向かって飛び去り、その鋭い鷹の目は雲に覆われた聳え立つ山の崖と、下に広がる果てしない大地を見下ろしていた。風に押されて、朝日の光に照らされて、彼の両翼は穏やかで、その目は鋭くしっかりしていた。
そして、彼は遠くの見えにくい白い点になるまで滑空を続けた。
「願いを叶える空からの流れ星は、もうすぐ失ったものをすべて取り戻させるんだ」

The Legend of the meteor.....

I

夜明け II

澄んだ小川は、そーと下り、果てしない山麓まで蛇行していく。
夜が明けると、最初に毛布を蹴り出したのは、翠緑の服を着た貴族のレンジャーだった。袖口にはフリルがあり、シルクサテン素材で、おそろいのタイトなズボン、典型的な軽装だった。
ホルン・ナスウェイは小川のほとりに歩み寄り、冷たい川の水を掬って頬をたたき、そして悲しげなうなり声を上げた。「――冷たい！」
「あはは！ホルンちゃん、早朝からその元気さで、昨夜の狼の遠吠えが夢の中の恋人を追い払えなかったみたいね」
「ホルンちゃんじゃない、クロスボウマスターだよ！それにナスウェイ貴族のホルン・ナスウェイだ！クソババア、貴族の基本的な礼儀を学んだ方がいいぞ！そうだ、俺とあんたたちの身分は違うんだ」ホルンは濡れかけの茶色の短髪を振り、手に持った濡れタオルを絞りながら、まだ起きていないデスティニーを不機嫌に罵った。

「貴族？」デスティニーは唇をすぼめて、思わず「ぷっ」と笑ってしまった。「ああ、貴族だったのを忘れていたわ。私たちみたいな「やつら」と長く付き合いすぎたからね。流れ星を追いかけるため、君は本当に辛抱しているわね」。

「ああ、お前の言う通りだよ、ババア！そうだよ」ホルンは手に持っている粗いタオルを力強くまっすぐにして、乱暴に頭を雑に拭いてから、キャンプファイヤーに近づき、そのタオルをデスティニーの顔にぶつけた。「いつかお前の耳を引き裂いて、その中身が一体何なのかを研究してやるぜ」。

デスティニーはすぐに悲鳴を上げ、タオルを地面に投げ、隣りにいる赤髪の少女に向かって叫んだ。「グウィネフ！ホルンにまたいじめられるんだよ。おばあさんのために何かしてくれ！」

どうやらグウィネフはデスティニーの切迫した叫び声を聞いたが、彼女はこの仲がケンカ相手の日常の騒動に巻き込まれるつもりはなく、野外用具を車両に積み込んでいるだけだった。「はーい、みんな！早く準備を整えて出発しないと。山の天候がだんだん寒くなってきって、もうすぐ雪が降り始めるかもしれませんね！」

「そうか？　それはいいじゃ、俺は雪が好きだ」ホルンは軽く微笑んでいた。「十数年前、ナスウェイ家の屋敷はよく……」

「ホルン、余裕があるなら、このキャンプの道具を運んでくれないかしら？」少女はいくつかの鉄の鍋を抱え、冷たい表情でホルンの耳元に迫った。「ナスウェイ家の話はもう何度も聞きましたよ」。

ホルンは気にせずに肩をすくめた。グウィネフの軽蔑的な態度にはもう慣れている。その代わりにこの荷物を自分で運ぶより、最近加わった若い仲間を呼び寄せることのほうがもっと慣れていた。

「おい！ノエル、早くこっちに来てくれ！グウィネフが手伝ってもらう必要がありそうだぞ！」

「え、本当ですか」

「もちろん、疑うなよ」ホルンはゆったりとノエルのそばに寄り、肩に手を置いた。「聞いてくれ、俺にはもっと重要な任務があるんだ。グウィネフのことはきみにしか頼めないんだから……」

「ちょっと、まだ任務があるんですか」ノエルは右の肩に疑念の目を向けた――深緑色のスーツを身に着け、袖口にはレースが飾られ、まるで本当の貴族のものだった。

「深夜に吠えたあの狼たちを覚えているかい？　奴らの動きを調べに山腹に行かなきゃ。それにキャンプ場の片付けはきみに頼んだよ、お仲間さん」ホルンはにやりと笑い、ノエルの肩を軽く叩いて、嬉しそうにキャンプ場から離れて、複雑な表情をしたノエルを残して行ってしまった。

デスティニーは、遠ざかるクロスボウマスターの姿をちらりと見て、いたずらっぽく舌を出し、近くに並べた瓶や缶を手際よく荷物袋にまとめた。これらの缶はかなり古そうに見えるが、中には彼女の秘密の宝物が詰まっていた。

ノエルはデスティニーの荷物を受け取り、丁寧に馬車の中に積み込み、傍らにいるグウィネフは昨夜の毛布を片付けていた。

「ノエルくん、いつもありがとうね」デスティニーは最後の荷物を持ち上げ、息を切らせてノエルに手渡した。「本当に助かったわ」。

「平気ですよ、おばあさん」ノエルは慎重に荷物を受け取り、彼女に向かって微笑んだ。「でも、食事のときにベーコンを一枚多くしてくれると嬉しいですよ」。

「あら、ノエルくん、どんどん商才がついてきたわね」デスティニーは手を組み、気まずそうに「カッカッ」と妙な笑い声を出して、そして、舌を出した。「でも残念、次の町まで待ってちょうだい。昨夜あなたが食べたベーコンは最後の一切れだったわ」。

「ふふ、おばあちゃんの言う通りだ。ノエルは食いしん坊！前回カリヨン ワイナリ ータウンで買ったお肉は、ほとんどあなたとホルンに食べられちゃって、私たちはお肉のカスすら取ることができなかった」いつの間にか整理が終わった少女もふたりの隣に立って、可愛らしく軽く咳払いをした。「おばあちゃん、この食いしん坊をどうしたらいいですか」。

「そうね、ノエルくんに怠け者の貴族レンジャーを探していてもらえる？　山の霧が濃くなってきたし、先ほどグウィネフちゃんの言った通り、もうすぐ雪が降りそうと思うよ」

「雪？　でも、今は夏でしょう？　しかもこの山の高さが……」

「ノエルくん、最近の天気はちょっと変わっているようで、ギンヌ港の恐ろしい津波の話も聞いたよね。ここで吹雪が起きることにも驚かないよ」

「ノエル、ホルンに知らせてもらえるかな。馬車を運転してもらう必要がある」グウィネフは両手を胸に合わせて、大きな瞳が輝いている。「もう少し遅かったら、山で本当に雪が降っちゃうかもしれないから、それだと大変よ」。

本当に大変だ。大雪は手を凍傷にかかりやすいだけでなく、馬車を滑らせる可能性もある。それは些末なことではない。

「いいよ、それは問題ないだろう？」グウィネフの話しが終わる前に、ノエルは既に馬車から飛び降り、少女の前に着地した。そして、息ぴったりにハイタッチした。「でも、先に言っとくけど、次回の火起こし作業は君に任せるよ。どうだ、約束できるか？」

「約束するよ」グウィネフは少年の肩に落ちた針葉を払い落とし、可愛く舌を出した。「じゃ、お願いしますね、ノエル」。

グウィネフは馬車の床に足を踏み入れ、中の収納スペースを何度も確認してから、荷物を引きずり込んだ。
普段なら、彼女は暖かい毛布の中でゴロゴロしているだろうが、でも今日は約束の場所に向かう大切な日だ。みんなは早く出発しなければならならず、彼女も例外ではない。額から伝った大きな汗滴を拭い、彼らは間もなく半日以上馬車に乗るから、残りの荷物を一生懸命移し、次の旅を快適にするよう努力していた。
でも、この時、荷物の中に紛れ込んだ微かな輝きが彼女の注意を引いた。少女はそっと足を踏み入れ、その前で立ちすくんだ。ペンダントの上には翠緑の宝石が嵌められて、魅力的な光を放っている。まるで手招きしているように彼女を迎えている。そして、それに応えるように、少女はそっとペンダントを手に取り、慎重に手のひらに乗せ、その巨大な翠緑の宝石を軽くに触れ、鉄灰色のチェーンを懐かしそうに見つめた。
これから、その日の思い出が波のように再び押し寄せ、彼女の視界を覆い尽くした。
傾いて崩れ倒れた柱が燃え盛り、息も絶え絶えの赤髪の男の上に圧し掛かっていた。
彼は最も大切な家族の宝物を彼女に託して――その水色のワンピースを着た女の子に何度も言い聞かせた――生き抜け、エンシェント家の後継者よ！いつか家宝のネックレスの秘密を解かなければならない日が来るだろう。
かつての生活はすでに消え去ってしまった。
今少女ができることは未練さえも過去の記憶を閉じ込め、その火炎ですべての過去の思い出を焼き尽くしまた――去り行くエンシェント一族とともに。
独りで朝陽に背を向け、グウィネフは古い家族のペンダントを手のひらで握りしめ、天の神の残酷さに呪った。そうすることでのみ、心の中に残った怒りを少し和らげることができるから。けれども、その時間は長く続かなくて、すぐに外から続々と聞こえる驚きの叫び声が、彼女を現実に引き戻した――それはデスティニーの声だった。
「グウィネフちゃん！どこにいるの？　まだ荷造りをしている？　グウィネフちゃん？」

「ここにいますよ、おばあさん！何があったんですか」少女は急いで手にしていた宝石のネックレスをしまい、戸惑いつつ馬車から顔を出した。

「エンジェル、早くホルンちゃんをボコボコにしてやって、悪霊に取り憑かれたかもしれないわ。悪魔とか変な言葉をずっと叫んでいるのよ。グウィネフちゃんは彼に取り憑いている邪悪な山の精霊を追い払えるかもしれない！」デスティニーは息を切らしているホルンの傍らに立ち、ノエルの背中を軽く叩き、手に持っていた鉄製のケトルを差し出した。

「もう、ホルンちゃんと呼ぶな、ババア！」ホルンは矢筒に素早く向かい、麦わら帽子をつかみ、デスティニーの頭に荒々しくかぶせた。「よく聞け、全員馬車に乗れ！今すぐ！」

「ちくしょうホルン、誰かが何が起こったのか教えてくれないのか？」デスティニーは目を大きく見開き、疑問に満ちた顔で緊張したホルンを見つめ、次いで後についている少年を一瞥した。「ああ、ノエルくん、彼の様子を見て、誰がうちのホルンちゃんを怖がらせたの？」

「それは……群れの狼です、おばあさん」ノエルは苦笑を浮かべた。「狼が来たんです」。

ノエルは震えながら両手を軽く擦り合わせた。山中の天気は常に変わりやすく、気温が急に数度下がったので、鳥肌も立っていた。おそらく、あの厚手の黒いマントを着るべきだった。この薄くて粗い亜麻のシャツだけでは足元から上がってくる寒さには耐え切れなかった。

「よ、ホルンさん！」しばらくして、ノエルは貴族と名乗るレンジャーをようやく見つけ、彼に明るく手を振りながら、ゆっくりと曲がった大きな木のもとに向かって行った。「もう出発の時間です。山中の霧がだんだん濃くなってきて、もうすぐ大雪が降り出すかもしれません」。

「シーッ！静かに、バカ！」ホルンはノエルの両手を掴み、木の下から引き上げた。「お前さ、俺たちの位置をばらすところだったぞ」。

「何でですか」ノエルは枝に登り、戸惑って神秘的なレンジャーの隣に近づき、彼の視線に従った。

それは灰色の狼の群れだった。彼らは山麓の木々の周りに集まり、騒がず、吠えもせず、ただ静かに座っており、リーダーのオオカミの指示を待っているようだ。もしもう少し暗ければ、通りがかる旅人は飼いならされた羊だと間違えるかもしれない。

「灰狼？　そこで何をしているんですか？」ノエルは戸惑って聞いた。

「分からないが、昨夜の狼の吠え声は、おそらく奴らの仕草だと思う」ホルンはまだ遠くを見つめながら、興味津々の表情を浮かべてにやりと笑った。「最初は奴ら、ただ森の中の普通の群れの狼だと思ったが、それは大きな誤解らしい。数が多すぎて、北にあるヤギリッジでもこのような光景は見たことがない」。

「僕たちはどうすればいいですか」

「どうすればいい？　どうにもできない」ホルンは口角を上げ、汗を拭いた。「へへへ……もちろん、奴らが俺たちに気付かないうちに、振り返らずここから出ていくに決まっている」。

ホルンの言った通りだ。彼らは傭兵団であるが、今日は戦場に出る日ではない。このような数多い狼の群れにあった場は、逃げた方が賢明だ。しかし残念なことに、これらの灰狼たちは単なる獣ではなく、あいつらは賢く、狡猾で、危険だ。二人が木に登った時、いや、もっと前から、あいつらは傭兵団を狙っていたかもしれない。

「ねぇ、ホルン……」ノエルは不安そうに眉をひそめ、そばにいるレンジャーに肘で軽く突いた。「あの灰狼たち、まだ僕たちに気付いていないんでしょう？」

「ハハハ、バカ。当たり前だろう」ホルンは冷笑し、口の端に軽蔑の笑みを浮かべて、心配していないようだ。「俺はヤギリッジで一番強い……」。

「でも、なんで奴らはずっと僕たちを睨んでいるんですか。トラブルを起こしたいことはないですね」

「何？」ノエルが言い終える前に、ホルンの顔から笑顔が完全に消え、代わりに少年が見たことのない恐怖の表情が現れた――今回、レンジャーはやっと山壁をかけ登ってくる灰狼に気づいた。あいつらはその突出した太く鋭い爪で山を登り上がった。その登りはそんなに順調ではないが、それでも多くの灰狼が山頂に登って、二人の居場所に向かってきった。

ノエルとホルンにとっては、このような恐ろしい光景を見たら、彼らはこれ以上ここに留まる勇気もうなかった。今の彼らは空を飛ぶ鷹よりも速く走り、風さえも追いつかないほどだった。弓と矢を持っていても、こんな大量の狼の群れに立ち向かうことは得策ではなく、逃げるのが一番だとレンジャーはよく分かっていた。更に、あいつらは普通の狼とは違う。岩を登れる狼なんて、おとぎ話ですらも出たことがないだろう。

「走れ！早く走れ！」

「じゃ、今どうすればいいの？」ノエルとホルンの真に迫った説明を聞いたグウィネフは、眉をひそめ、静かに腰に手をやり、無意識に短剣を触った。

「どうするって？　そりゃ逃げるに決まってるでしょう！急げ！」ホルンは枝に掛かっている短弓を取り、急いで腰のベルトを締めた。「それに、森の獣たちの餌食になりたくないなら、今すぐ動き始めるぞ」。

ホルンはカバーを力強く引き下ろし、手綱を切り、弓弦を何度か引いた。谷に再び狼の遠吠えが鳴り響いたとき、彼はすでに装備を整え、すばしこく矢筒を背負っていた。

「来た、もう来たぞ」ホルンは目を細め、巧みに短弓を引き、霧の遠くに一矢を放った。彼の動きは素早く、余分な動きは一切なかった。さすがリベラシオンの神の射手であり、狩猟を専門とする貴族のレンジャーだった。だけど、遠吠えをしている悪魔たちは彼に驚かされていなかったけど、デスティニーは慌てて頭を抱えて走り回り、怒鳴った。「へ、へ、へ！バカヤロー、何をしているの？」

それでも、ホルンはデスティニーの怒号を無視し、矢と弦の低い笛の音に真剣に耳を傾け、野獣の悲鳴が響くまで待っていた。そして、矢の羽根が再び弦に引っ掛けられ、一本、二本、三本、それぞれの矢が目標に命中し、異なる距離で狼の悲鳴が上がった。ところが、この結果は、彼に誇らしさに満たさせるものではなく、むしろ驚きの表情を浮かべた。「……なんてことだ」。

「ああ、ちょっと、ホルン・ナスウェイ！」ホルンが反応する前に、デスティニーは山間を響き渡る尖った叫び声で、彼に向かって怒鳴った。「これらの矢が私の耳のそばを飛び越えていって、その通り過ぎていく轟音さえ聞こえたよ！私を殺そうとしてるの？　言ったじゃない、もし……」。

「そう俺みがしなかったら、ああ、それじゃ！お前たちは裸の手でその群れの餓えた狼たちと戦うか？」弓を構えるレンジャーはまだ前を見据えたまま、狼の遠吠えが聞こえなくなるまで、足を軽快に動かして馬車に後退した。狼たちはすでに矢を避け、濃霧を突破し、キャンプに向かって真っ直ぐ走り出して、わずか数十フィートしかなかった。

今度、ホルンはやっと手を止めて短弓をしまい、速やかに馬車に飛び乗んだ。そして頭を仰ぎ、大声で叫んだ。「グウィネフ、ノエル、デスティニーを連れてこい！」

ホルンは逃げた。彼は長細い馬車を操り、狭い山道を猛スピードで走り去った。去り際、彼は馬車から頭を出し、目を見開いたデスティニーに向かって手を合わせた。「フォルトゥーナの運命の手がお前たちを見守りますように」。

「ちくしょう！ホルン・ナスウェイ！あのバカ、私たちが準備できるのを待たないで、逃げた！」残念ながら、デスティニーの怒りの叫びは相手の耳には届かず、馬車は既に彼らの目の前から消えて、約束の場所に向かって駆け去った。

もちろん、馬車の後ろには情熱なファンたちが続いている腹ペコの灰狼たちだ。

この隙に、魔女はついに少女の手を握り、急いで暗闇の長い馬車に乗り込んだ。グウィネフの助けがなかったら、デスティニーは前方から襲ってきた灰狼たちに、太ももを噛まれ、血が流れている大きな肉片が引き裂かれただろう。

「ほら！みんな！何を待っているの？　狼たちが見逃してくれるように祈るつもりなの？　それとも、ここで最後まで戦う覚悟を決めたなの？」グウィネフは車の扉を強く閉め、扉に挟まれた痛がる灰狼を飛び蹴り、踵を高く上げて飢えた狼に強い踵下ろしで重い一撃を与え、野獣の悲鳴が聞こえなくなってから、襲撃を止めた。そして、安心して扉を開け、動かなくなった灰狼を蹴り落とした。

「確実にまた現れるかしら」グウィネフは手を軽く叩き、車底に倒れた灰狼が意識を失ったことを確認して、興味津々で振り返した。「狼たちが来る前にここを立ち去り、私たちを見捨てたあのバカレンジャーを追いかけないと。ノエル、馬車を運転してみたいの？」

「何？」ノエルは自分が聞き間違えたのかと疑っていたが、もしグウィネフが非常に真剣な表情をしてなかったら、冗談だと思っていた。険しい山道で馬車を安定して運転すること……まあ、冗談じゃない。

「えっ！本気で言ってる？」

グウィネフは軽く唇を噛み、デスティニーをちらりと見て、迷っている表情を浮かべた。これは難しい決断だった。彼女たちはノエルが馬車を運転することを見たことがないし、彼が勇敢に戦った話も聞いたことがない。でも、誰かが弱いデスティニーを世話しないと、また誰かがこの馬車を運転しなければいけない。

時間は待ってくれないし、飢えた灰狼たちもなおさらだ。あいつらは少女に躊躇する時間を与えず、ただ遠吠えを繰り返し、次の攻撃が迫っていることを予告している。

彼らはまだ決断を下していないが、狼たちは次第に近づいてきている。

風の音が咆哮と混ざり、人々の内なる恐怖を呼び覚り、侵略の前兆を予示し、車底に倒れた灰狼まで起こした。

灰狼は突然目を開け、慎重に体勢を整え、背中を丸くし、デスティニーの驚いた声と共に跳び起きた。

灰狼の反撃は速く、正確で凶暴で、しかも賢かった。

しかし、灰狼の行動が速いが、それよりも速い人がいる。

「グウィネフ！」灰狼は牙の鋭い大きな口を開け、よだれを垂らしながら、まだ気づいていない少女に向かって狡猾に襲いかかった。

人間の雪のように白い首が灰狼の目の前にあり、その力強い顎で軽く噛みつけるだけで、真っ赤な甘い液体が噴き出し、馬車の中に溢れるはずだった――だけど、灰狼は空振りした。少女の背後に立つ痩せ弱い少年が彼女を守ったのだ。鋸のように鋭い牙で噛みつく前に、ノエルは素早く彼女を腕の中に抱き寄せて、荷物でいっぱいの馬車の中を転がり、この灰狼の凶暴な襲撃を辛くも避けた。

それが、狼はあきらめることなく、むしろ口を開けて噛みつこうとした。まるで美味しい餌を見つけたかのように、グウィネフのしなやかな脚を貪欲に狙ってきたが、一度たりとも噛みつくことはできなかった。

「ああ！神様、なんでまた生き返ったの？」少女のすねに噛みつこうとしていた灰狼が目前に迫って、隅で縮みこんだデスティニーはやっと勇気を出して、荷物からおたまを取り出し、野獣の鼻先を打った。「退け、退け！クソ野郎！」

デスティニーの攻撃は灰狼に大きな傷害を与えなかったが、気を惹きつけるには十分だった。魔女によるこの乱暴な攻撃より、灰狼は最初の標的を変更して、デスティニーに向かって襲い掛かろうとした。

これは大きな過ちだった。なぜなら、これにより少女は一息つくチャンスを得て、足元を固め、腰に収めた輝く白い短剣を巧みに抜いた。「……よし、どうやらやつはこの決闘を続けたがっているようよね」。

銀の光がグウィネフの目の前で瞬く隙に光り、深く灰狼の背中に突き刺した。そして、彼女は柔らかい狼の腹に向かって蹴りを一発放つと、野獣は目標を放棄して、少女に向かって再度飛びかかった。

今回は少女がその追撃をかわすことはできなかった。足元の荷物に足をとられ、野獣に倒されてしまった。彼女は転倒したまま、首に向かって押し寄せる巨大な口を避けながら、短剣を振りかざした。

しかしながら、これはまだ最悪の状況ではなかった。遠くで再び狼の遠吠えが響き渡り、新たな危機が迫っていることを繰り返し彼たちに知らせてきたのだ。これこそ壊滅的で絶望的と言えるだろう。

この絶望に応えるように、すぐに森から三匹の灰狼が飛び出し、同時に馬車に向かって走っていた。あいつらはもう疲れ切っていたが、獣の血があいつらをこの狂宴に誘っていた。馬車に近づくにつれ、獲物が目の前にあるから、灰狼たちはより凶暴で危険で、猛スピードで動いた。あいつらはかつて霧に包まれた山中で獲物を探し回り、もう止まることができず、大きなクマですら道を譲る勢いだった。

「ちくしょう、もっと灰狼がきた！」デスティニーは緊張した表情で隣に立って、震えた手でおたまを握りしめ、焦って何度も辺りを見回した。「これで十分なトラブルじゃないの？　今どうすればいいの？　私たちはここで死ぬわ！全ては私たちを見捨てて逃げたあの使えないレンジャーのせいだ！」

灰狼は少女の上に重なり、狂気のように噛みついていたが、必死に抵抗する赤毛の少女は隙を見つけ、瞬刻の逆襲の機会を捉えて、短剣を灰狼の喉に正確に突き刺した。

「ハ……ハハー……おばあさん」グウィネフは力を振り絞って無力な野獣を押しのけ、やむなく苦笑いを浮かべた。「最後まであなたと一緒に戦えて光栄ですよ。ただし、その武器がおたまでなければの話ですよ」。

「ふふ！私のエンジェル、このおたまを舐めないでね。もしかしたら、後で悪い狼たちを一匹か二匹、気絶させることができるかもしれないよ」

「へえ、そうですか」グウィネフは微笑を浮かべ、剣に付いた汚い狼の血を振り払い、再び馬車の扉に戻って、いつでも戦う準備ができている攻撃的な態勢を取った。「では、最初に灰狼を倒す勝負をしましょう、どうでしょう？」

「いいよ！それで決まりだよ。でも年齢のせいで私をなめないでね！」デスティニーは口よりも手が速く、グウィネフが剣を振る前に、おたまはすでに飛びかかってきた灰狼に叩きつけられ、「コン、コン」と鳴り響いた。

灰狼は痛みを耐えて二歩後退したが、またすぐ諦めずに襲いかかってきた。さらに今度は後ろから追いついてきた二匹の凶暴な援軍が加わり、鋭い牙の大きな口を開けて一斉に襲いかかってきた。

本当に最悪だ。一匹の狼だけでも既に十分な脅威だったが、今回は二匹追加され、さらに彼らの背後には山を覆い尽くす仲間たちがいる。この状況でグウィネフとデスティニーの心に残ったのは絶望しかなかった。この時、グウィネスとデスティニーの心には、無力感以外に絶望しか残っていなかった。彼女たちは泣きたいが、目の前の狼たちはにやりと笑っていた。

明らかに狼たちは最終的な勝利を手に入れるだろう。次の結末は誰でも予想できるから――あいつらは一斉に馬車に飛び込み、少女と年配の魔女を狂ったように噛みつくだろう。おそらく人間の抵抗が数匹の仲間を奪うことになるかもしれないが、それでも結末が変わらない。なぜなら、あいつらの犠牲は無駄ではなく、これは最高指導者であるリザードマンが望む究極の命令だ。目の前の馬車にはあいつらが欲するものが隠されているのだ。

狼の群れはあと少しでそれを手にしれて、使命を果たすところだったが、万物の運命を支配する女神はその瞬く間に考えを変えた。凶暴な灰狼は一斉に跳び上がって、罵り続けるデスティニーに襲いかかり、整然と並んだ鋭い牙を露出し、手に入れようとしている勝利の果実を嬉しく迎える。

けれど、あいつらの襲撃は空振りした。

この瞬時、馬車は急に動き出し、山道の反対側に向かって疾走し、この飛び跳ねを巧妙に避けた。これは何の前兆もなく、何の停滞もなく、まるで神々のいたずらのようであり、狼たちの士気に深刻な打撃を与えた。

車両内で熱狂的な歓声が上がる一方、この群れの灰狼は再び息を切らしながら走り続けて、車両を追いかけた。体力が尽き、重傷を負うまで、あいつらは前に進み続け、使命を果たすまで馬車を追い続けるはずだ。

この追いかけっこはまだ終わっていない、むしろ……狩りは今始まったばかりだ。

山道の松葉が目の前を素早く通り過ぎ、ホルンは巧みに馬車を操り、崖を見上げた。あそこには群れの狼が集まり、崖から頭を出したあいつらは山頂全体を覆っている。

「今日は最悪だ」ホルンは歯を食いしばり、再び馬車を加速させた。幸いなことに、後ろの馬車がついに追いついた。

「ふー……いや、この天気は結構快適だと思うぞ」低い声が突然、レンジャーの後ろから響いた。それは槍を持った坊主のような巨漢だった。「寝ているところ君に起こされた以外だなあ」。

巨漢は馬車の扉にもたれかかり、銀の長槍を片手で持ちながら、眠そうにあくびをした。「もうちょっとで酒蔵のかわいらしいお嬢さんたちを捕まえて、夢の中で楽しむことができるところだったが、今はすべて無駄になった」。

「それはちょっとじゃないようだな、ブリエン」ホルンがにやりと笑った時、車輪が突き出した岩にぶつかり、激しく揺れ、時折、不気味な「ギーギー」という音が鳴り響き、まるで空中に浮かぶ心臓に応えているようだった。レンジャーは彼を目覚めさせたから――銀の長槍ブリエン、その美夢を妨害され、すぐに相手の耳を二つ引き裂いた力強い巨漢だ。

「紳士になれよ、ホルン、レディに接するように」

「ハハー！それは困ったな！」ホルンは急に曲げ、馬の鳴き声の中で左側を回った。車輪が荒っぽい動きで砕けた石を蹴って、無限の深淵に落とした。

「俺がやろう、うちのレディはこんなに苦労させたるな」ブリエンは眉をしかめ、すぐに手綱を受け取り、興味津々でホルンに尋ねた。「後ろの馬車を運転しているのは誰だ？」

ホルンは御者席から立ち上がり、目を細めて、後ろの馬車を眺めた。予想外に、御者席に座っているのは最近傭兵団に参加したばかりの少年、ノエル・パルトロウだった。

レンジャーは目を細め、軽く顎を掻いて、信じられないようにつぶやいた。「まさか、ノエルのか？」

「へへ、やるじゃないか？」

「ああ、次に言うことはこうだろう！！」ホルンは口角を上げ、ブリエンの酔っぱらった様子を楽しそうに真似しながら、奇妙な調子で言った。「言っただろう？　言っただろう？　俺って人を見る目があるだろう？　わざわざノエルを連れてきたのは意味があるんだぞ、ホルン。これこそ未来を予測し、知識が豊富で賢明な軍師と呼んでもいいくらいだ！」

「黙ってて、ホルン・ナスウェイ」ブリエンは不機嫌そうに彼を睨み、ホルンの頭を数回つついた。「ノエルのおかげで、お前の首がまだつながっているんだ。あの馬車を失ったら……殿下はともかく、俺もお前の皮を剥ぎ取るぞ。野良猫ちゃんとデスティニーは仲間なんだから」。

ブリエンは手を首に横たえ、切り裂く仕草をして、そしておぞましい舌出しの表情を作った。

「怖がらせないぜ、お前のことをよく知っているよ。俺たちは長年一緒に戦ってきた仲間だから」ホルンは口角を上げ、言い表せない偽りの微笑みが浮かんだ。ブリエンも冗談を言っているから、彼は今やっと自分の耳を保つことを確かめた。

「本気だよ、ホルン。確かに傭兵の生存ルールは戦場に向かい、戦争に参加し、報酬を受け取り、最善を尽くして生き残ることだ。死か生か？　それは運命の女神に委ねられ、だれも誰かのために責任を負うことはない。だけど、他の傭兵とは違って、ノエル以外俺たちは風の団の精鋭傭兵だ。みんなが貴重な仲間であり、資産であり、加えて、彼女は殿下の娘だ。もしグウィネフが君の身勝手な行動で負傷して出血したら、殿下はお前を厳しく処分するだろう」ブリエンは肩をすくめ、手綱を引っ張りながらホルンを狭い御者席から蹴った。「スピードを上げるぞ、ホルン、お前は後ろの馬車をカバーして屋根に乗れ！」

「ところで、ノエルって、よくやってたなあ。お前が教えたのか？」

「ふふ、まさか」ホルンは屋根の上に一歩踏み出し、風に舞う公爵の帽子を片手で押さえて、爪を研いで正確に攻撃できる短弓を取った。

「もっと実用的な戦術を教えたいんだけど、どう？」

「それは俺たちが決めることじゃないよ。あいつを勝手に連れてきたのは、お前とグウィネフだ。まだ殿下に認められてないぞ！」ホルンはため息をついたが、弓を構えている手は止まってなかった。

「シュッ――」という音がした。

空を引き裂いた矢が弦から飛び出し、迫りくる狼の口に突き刺さって、無情で獣の頭を貫いた。狼は最初に低い鳴き声を上げ、そして力を失って何度か転がり、右側の深淵へ落ちていった。

「真中に当てた？　おお、やるね」

「俺が誰だと思ってる？　ハハー、ブリエン……俺はホルン・ナスウェイだ。殿下に最も期待された神の射手だぜ！」ホルンは自慢げに笑い、二本の矢を次々と射出した。

「ハハー、たぶんなあ。ただ、たまに迷惑だけどなあ」

「おい、ブリエン……デスティニーがあんたの行方不明の姉妹だ、賭けてもいいよ」冷たい風が彼の頬をなで、茶色の短髪をなびかせ、気勢を高めた。貴族と名乗るエースレンジャーは弓を引き、矢を次から次へと射出し、瞬く間に灰狼たちを仕留め、後方から追いかけてくる野獣の脅威を簡単に排除し、獲物を見つけたハンターの表情を浮かべた。

「何だと？　彼女からこんなことを聞いたことがないぞ」ブリエンはつるつるの禿げた眉をしかめて、言葉の裏に隠された意味に全然気づいていなかった。

「ふふ、次は匂いをよく嗅いでみて。彼女の口から同じ匂いを探し出せるかもしれないから」ホルンはブリエンに背中を見せ、笑いを隠そうとした。

では、ブリエンは？

ブリエンはホルンの皮肉に気づかず、真面目に手のひらに息を吹きかけ、嗅いでいた。全身を震わせ、こらえきれなくなったホルンの笑い声を聞いて、やっと気づいた。ブリエンは手元の銀の長槍を高く掲げて叫んだ。「くそったれのホルン・ナスウェイ！」

ノエルは馬車を運転し、濃霧の中を進んでいた。寒風が吹き付け、それでも前方の馬車に追いつくことを阻むことはできない。

曲がり角で、礼服を着き、公爵の羽帽を被った貴族のレンジャーが車の屋根に立っていて、彼らを親しげに手を振っていた。誰か他にいるだろう？　もちろん、ホルン・ナスウェイに決まっている。彼らを見捨てた貴族のレンジャーだ。

「ああ！ホルン、どうしてそこに立っているんですか」ノエルは冗談交じりに言った。「御者席でお尻を痛めたんですか」。

「ここはかなり快適だぞ。もしここで一生座っていられるなら、喜んでそうするだろう。残念だけと、この馬車はもう一人の暴君も乗っていた。傲慢で理不尽で、俺の席を占領した」ホルンは唇を尖らせ、両手を広げ、あきれたように肩をすくめた。「とにかく、あいつはお前らを助けろと命じた。だから……さて、今はお前が運転しているの？」

「ご覧の通り、ホルン様」

「言ってくれ、何を手伝ってほしい？　坊や」ホルンは体を軽く曲げ、片手で耳をかざし、少年の答えを待った。「願いをかなえてあげるぞ」。

「わあ！神のご加護がありますように。この言葉をずっと待っていたんですよ、ホルン様」ノエルは喜んでにやりと笑い、時折後ろに追いかけてくる餓えた狼たちに振り返って見つめた。「グウィネフとデスティニーの様子も知りたいけど、やっぱりまずはこの迷惑な連中を片付けることです。食卓の上のハエのように厄介ですからね」。

「よし、これが聞きたかった答えだ」ホルンは太ももをたたき、満足げに笑顔を浮かべ、その後、弓の弦を引き、野獣に集中して弦を鋭角になるまでじっと狙い続けた。

矢羽根は風に震え続け、蜂がブンブン飛ぶような音を立てた。ブホルンは目を細めながら、冷たい風も野獣のますます近づく鳴き声も気にせず、手首をしっかりと支えていた。

突然、彼のしっかりと閉じた指を野獣が跳躍する刹那に連続的に緩みた。

もちろん、これが偶然でなく、ホルン・ナスウェイの計算通りなのはだれの目にも明らかだった。

弦に架けた三本の矢が空を切り、後ろの馬車の屋根をかすめ、追いかけてきた三匹の灰狼を一斉に貫通した。

この灰狼たちは原地で何度か転がった後、やがて一斉に深い山谷に落ちてしまい、悲鳴すら上げられなかった。これはホルンが狙った通りだ。彼は弓を持って、滑り落ちた獣たちの黒い影が山中の霧に呑まれたまで、遠くから眺めた。そして満足げに指を鳴らした。「ビンゴ」。

ノエルは普段とは異なるレンジャーの様子をちらりと見た。彼の目は輝いており、手は巧みな職人のように矢を素早く引いて放つと、野獣たちの遠吠えとともに、活気に満ちた踊りの曲を織り成すようだ。この楽曲には軽やかなリズム、高揚した弦楽、そして絶え間ない荒れた風の咆哮で組み合わされていた。

ホルンは胸を張って、顔に吹きつける冷たい風を楽しんでいた。彼はこの瞬間、まるで酒場の吟遊詩人となり、旋律とリズムに合わせて演奏してダンスして、灰狼たちの遠吠えが静まるまで続けた。「楽しんでくれ！魂で感じろ！これは貴族のレンジャーの新作、才気横溢の流行の詩篇だ！」

「才気横溢？　神様、何て恥ずべき発言だ。あぁ、でも、こっちはむしろ『先に逃げ出す臆病者』があんたにぴったりだよ！」矢が射終わる前に、魔女は車蓬を開けて顔をのぞかせ、レンジャーをからかうように嘲った。「ちなみに、頭に何が起こっていたの？　空気に向かって独り言を言っているなんて、幻覚薬でも飲んだの？」

「ああ、デスティニーダーリン、この一連の質問で自分の舌を噛んでしまうことを心配しないのか？」

「ああ、あんたの言う通りね。次は喧嘩する前に、情熱的なキスでもしよう！」デスティニーは挑発的に唇に指を置いて投げキッスをした。

「冗談はやめてくれ」ホルンは嫌そうに顔を背け、目を二度丸くした。「いや、君とキスするくらいなら、殺された方がマシだ」。

「ちくしょう、ホルン！流れ星の祝福を手に入れると、今日言ったすべての言葉を後悔させるよ！」デスティニーは文句を言いながら、後ろを振り返って確認した――くそっ、あいつらはまだ諦めていなかった。

「もしお前の望むことがかなうなら、祝福するぞ、ババア！」ホルンは妙な笑みを浮かべ、デスティニーを嘲笑った。

少年は両者の間に挟まれ、ついにホルンが魔女と対立している理由を理解した。この二人は最初から水と油のように合わない存在だった。まあ、それは完全に悪いことではない。少なくとも、車内にいる二人は無事である

ことを示している。デスティニーはまだ口喧嘩ができる余裕があるから。
「ホルン。ところで、教会につくのにあとどれくらいかかるんですか」ノエルは興味津々で尋ねた。「そこで流星に関する手がかりを見つけることができると思いますか」。
「分からない。それはすべて団長殿下の計画による。でも……」
「でも?」再び首を上げて見ると、ホルンはもう笑顔をしまい、真剣な表情で目を細め、再び短弓を引っ張っていた。
「まず、この悪魔たちから逃げなと、ふふ……」ホルンは素早く矢を張り、弦を完璧な水滴の形に曲げた。
風の中、矢羽が琴の弦のように鳴り、まるで力を蓄える致命的なスズメバチのようだった。
レンジャーはまるで石像のように肩にかかる短い髪を風に揺らして、静かに獲物をじっと見つめて、指先を引き締めた。その須臾、ホルンは矢を放った。まるで自由を望むハチドリを解き放ち、霧の中の敵を見つけてその額に美しい赤い血の花を咲かせる。残念ながら、今回このハチドリは期待に応えられなくて、一匹の狼の遠吠えさえ聞こえず、濃い霧の中に迷い込んでしまった。
ホルンでも外すことがあるのか? ノエルは手綱をしっかりと握りしめ、レンジャーをこっそり見た。
レンジャーは動かず馬車の屋根の上に立ち、矢の飛び立つ方向を冷静に見つめ、何が起こったのかを理解しようとしていた。確かに、リベラシオンに参加して以来、このような不思議なことは一度もなかったのに、まさか今日に限ってこんなことが起きるなんて、本当に不吉な予兆だ。
幸いなことに、レンジャーはすぐにハチドリからの返事を受けた。馬車が急速に次の曲がり角を曲がった際、その失われたハチドリはついに姿を現し、ホルンの耳元を通り過ぎ、顔に血の跡を残すところだった。
これにより、ホルンはやっと射た矢がなぜ返事が遅れたのが分かった。相手は、その生き物たちの足元にいる灰狼ではなく、灰狼に乗り、長槍を投げる異種の存在だ。

あいつらは霧を突き破り、片手で盾を持ち、も片手で長槍を投げ、馬車に向かって素早く飛び込み、口からは誰も理解できない「シャーシャー」という奇妙な音を叫び続けた。あいつらは人間でも野獣でもなく、これまでに見たことのない蜥蜴のような存在だった。

「急いで車内に隠れろ、ババア！」

「何……？」デスティニーは困惑して目を丸くしたが、魔女の反応を待たず、少女は既にデスティニーの襟元をつかみ、彼女を馬車の床に強く投げつけた。危機一髪の状況で、馬車を貫通した恐ろしい黒影を避けた。

「そ、それ、一体何？」デスティニーは恐れた表情で赤髪の少女を見て、顔色が青白くなって唾を飲み込み、痛みに大声を上げた。「ああ、くそっ！腰……腰もうちょっとでぎっくり腰になるところだったよ！」

「バカデスティニー、少し遅かったら、あなたの頭は撃ち抜かれていたんですよ！！」グウィネフは信じられないように舌打ちし、急いで彼女を引き上げた。「次回はそんなに運が良いと思わないですよ、おばあさん」。

とはいえ、この話は少し早かったかもしれない、特に彼女が散らかった魔法材料の山を見た時、「うわ」と驚きの声を上げて、少し苦笑いした。「まあ、今回もあまり運がよくないみたいですね」。

後ろの馬車から、悲痛な叫び声が響いた。それはデスティニーの尖鋭な声だった。

「あのイカれた女、また何か？」ホルンは矢を張りながら、急速に遠ざかる険しい山を見つめ、冷静に彼の目標を探した――森に隠れた妙な生き物たち。

「ああ、大丈夫ですか。グウィネフ？」

いくつかの灰狼が後追っている以外は、車両は山道を平穏に進み続けていた。

ノエルは手綱をしっかりと握り、こっそりと振り返った。

「大丈夫よ！……まあ、あまり大丈夫じゃないかな」グウィネフは仕方なく笑って答えた。「おばあさん、気が狂いそうになっているけど。その叫び声で耳が聞こえなくなるところだったわ」。

「なんで？　君何かしたの？」

「私？　私のせいじゃないよ！さっきの騒ぎで、おばあさんが一番大切な魔法の材料を押し潰しちゃった、だから、えっと……とにかく、それらのコレクションは彼女の宝物なのよ」

「プッ！ハハハ、まあ、幸いあのババアはビンや壺にカエルやヘビを詰め込んでいなくてよかったな。じゃないともっと怖い叫び声が聞こえたことだろう」

「おい！それはおばあさんに聞かせないほうがいいですよ、ホルン」ノエルはこっそりとにやりと笑ったが、彼も同じことをしないほうがいいことが分かっている。

一方、ホルンは目の端に涙を拭い、同意するように頷いて、まだ前をじっと見つめていた。「ハハハ！お前の言う通り。でもデスティニーよりも心配しているのは目の前の厄介だぞ……くそったれの神、信じられないほどのものを見たよ」。

デスティニーは袖口に付いているレースのフリルを噛みしめ、しわしわの両手で涙を拭き、まるで驚いた野良猫のように失望した表情で車両の隅に縮こまった。

車両にはさらに二本の漆黒の長槍が増えており、グウィネフはついにこれらの長槍がどこから来たのかを明らかにした――山崖の森だ。

「おばあさん、ここに待っていてください。一体どんな山賊なのかを確かめてきますから……ああ、まずい！」グウィネフは窓際にしゃがんで、そっと頭を窓の外に出して、外の状況を探ろうとした。だが、彼女はす

ぐに窓の下に縮こまった――一本の長槍が彼女の頭の上をすれ違い、轟音を立てて車両に突き刺さった。
彼女は黙って唾を飲み込んだ。これで三本目だ。
「いやだ……運命の女神よ、偉大なフォルトゥーナよ……ああ……待って、ちょっと！グウィネフ、私をここに置いていくつもりなの！い、いやだ……私をここに残さないで！絶対ダメ！」
「ああ、神様！おばあさん、私たちはわずか数歩しか離れていないです」グウィネフは隅に丸まってるデスティニーを見て、仕方なく微笑みを浮かべた。「心配しないで、すぐに戻ってきますから、いいですか」。
デスティニーは鼻水を激しく吸い込み、臆病そうに頷いた。しかし、魔女が返事をする前に、車両全体が激しく揺れ動き始め、彼女も目が回るほど頭も揺れた。
「あ、あっ！グウィネフ……私のアンジャル、聞いて……新しい魔法を見つけたみたいで、鼻水を吸う時に頭を強く振ると、この馬車は……」
「馬車はバランスを崩し、山から転落しますよ！窓のバーをしっかり掴んで、おばあさん！」
馬の鳴き声に伴い、馬車は突然左右に激しく揺れ始め、山の断崖から危うく転落しそうになったが、ノエルが間一髪で元の方向に引き戻したおかげで、死神から逃れることができた。そして、彼女たちはこの揺れが偶然ではないことを確信した。彼らは確かに追われており、それらの悪党たちは馬車の屋根にいることに間違いない。
グウィネフとデスティニーはためらいがちに見つめ合い、同時に上を見上げ、そして恐れた表情を浮かべた。今馬車の屋根には、黒い足跡が増え、密集して動き回っている。これはグウィネフがこれまで見たこともない光景だった。
「そんなバカな……絶対にこんなに簡単なことじゃないと言えます。私たちは狙われています！」グウィネフは急いで荷物でいっぱいの馬車の中を転げ回り、屋根から突き刺さった漆黒の長槍を巧妙に避け、外の仲間たちに緊張した声で尋ねた。「ノエル、ホルン、一体どういうことの？」

「そうだ、君の言う通りだ！俺たちは確かに狙われている。でも奴らは人間ではなく、不気味なリザードマンだ」ホルンの声が外から聞こえ、矢で風切り音と共に、敵を見事に射落とした。

「ちょっと、リザードマン？　ええ、今冗談を言う気分のか」グウィネフは思わず声を上げた。

だけど、デスティニーはこれが冗談ではないと感じた。音を立てる屋根を見ると、ホルンの言った通りの光景が広がっており、彼女は驚き過ぎで言葉が出ないで、突き破られた穴を覗いた――穴から蜥蜴のような奇妙な頭が突き出し、毒蛇のような舌を吐き出しながら、「シャーシャーシャー」と音を立て、血のような赤く丸い目で、車内のあらゆる角を覗き見ていた。

そして、大きな悲鳴が再び爆発したが、以前よりも高かった。

そう、グウィネフだった。

今、少女は奇妙な蛇の目をついに見た。

でも、彼女は訓練を受け、さまざまな冒険を経て、さまざまな奇妙な生物と戦ってきた。その場に立ち尽くすことではなく、代わりに、彼女は車両に刺さった長槍を素早く抜き出し、高く持ち上げ、迷わずリザードマンの頭に突き刺した。

長槍は、鱗で覆われた蛇の皮を貫き、平らな蜥蜴の頭蓋骨を貫通し、黒い粘液が次々と流れ出し、苦痛の叫び声と共に、やっとけいれんが止まった時、車の屋根から無力に落ちた。

ところが、これで終わりではなかった。グウィネフの行動は明らかに車の屋根に集まっている悪魔たちを怒らせ、彼らは騒ぎたて、躍り続け、怒りに満ちた車体を激しく揺れ動させ、進行中の馬車を転倒させようとしている。車両は激しく揺れて、金属がぶつかる鋭い音を立てた。毎秒ごとに、二人は限界点に挑戦する。

「こいつたちのちくしょう！アンジャル、何とかして奴らを止めなきゃ！」デスティニーはボサボサな長髪を何度も掻きむしって、一生懸命可能な方法を考えた。おもいついたのはほとんどイマイチだったが、彼女はベストを尽くした。

「何かいいアイデアがありますか！？」
「ううん、まだけど、もうすぐ！」
「急いで、おばあちゃん！奴らは私たちの馬車を倒そうとしているんです……こいつらは私たちを殺そうとしているんです！」グウィネフはなるべく体を低くし、馬車の屋根にひしめく悪魔たちに警戒し、あいつらが手に持つ漆黒の長槍で突かれないように怖れている。
「分かってる、分かってる……早く、デスティニー、何か考えて……ノエルくんの夕食にもう一枚のベーコンを追加する……いや、くそっ、違う！それじゃない！魔法の材料のコレクション……いや、それも違う！考えてみる……」
リザードマンの騒ぎは死神の運命の呪文となり、車輪の摩擦音と共にますます近づいてきた。
デスティニーはグウィネフの衣服をしっかりつかみ、窮地から抜け出す方法を必死に考えた。
その時、特製の鉄製の道具が揺れる馬車の中でデスティニーの足元に転がってきた。それはデスティニーの魔法道具だった。ぼんやりとした遠い記憶の中で、魔女がこれで遊んでいるのを見たことがあった。見た目は地味で石と同じ大きさのものだが、非常に大きな破壊力を持っている。普通の見た目の丸い鉄球で、耳に近づけると、時々揺れ動く細かい砂の音が聞こえた。
少女はその丸い魔法道具を片手でつかみ上げ、自慢げに微笑んだ。
もしかしたら、これがリザードマンから逃げるかもしれない、と彼女はそう思った。
「おばあちゃん、これ見てください」
「……え？」

「あなたの大切な魔法がここにありますよ」彼女は魔女の抱擁に鉄球を押し込み、悪い笑顔を浮かべた。「おばあちゃん、言ったでしょう？」

「言ったこと？　何を言ったの？」デスティニーは「魔法道具」を握りしめ、疑わしく彼女を見た。

「あなたはすべての悩みを空に放り投げ、美しい火花を打ち上げることができると言いましたよ」

「……美しい火花？」

「ああ！そう、美しい火花！」二人はお互いに見つめ合い、そして同時に「ドカーン！」と叫んだ。

少年は何かが燃えるような匂いを嗅ぎ、火打石の音も聞こえてきたが、もう遅かった。

振り返ったとき、すでに燃え盛る屋根と立ち昇る黒煙しか見えなかった。

「ドカーン！」

その瞬間、馬車の屋根全体が爆発し、これらの二人の狂った女が屋根を吹き飛ばしたのだ――もちろん、蜥蜴の怪物も巻き込まれた。あいつらは空中でばらばらになり、悲鳴を上げながら空中から落ち、すぐに追いかけてきた狼たちに冷酷に呑まれて消えた。

けれども、その後、全員がより恐ろしい光景を目に当たった。

馬車の後ろに、灰狼に乗った蜥蜴戦士の群れが現れ、山を超え、霧を突き抜け、馬車を追いかけていた。

Overpowering.....

II

ファイアトリック

一瞬、ホルンは自分が浮いているように感じた。

「クソババア！この馬車ごと爆破するつもりか？」

馬車は轟音を爆発し、すぐに刺激的な黒煙が上がった。

ブリエンは最初、軽くてゆったりとした曲を口ずさんで、メロディーに合わせてビートを叩いた。だけど、気にかけて振り返ったとき、彼の表情は一瞬で崩れた。「デスティニーの仕業？　ホルン？」

「ふふ、他に誰がいる？　これは彼女の得意分野だ」ホルンは彼に背を向け、もう一本の矢を放った。

「得意分野？　おやおや、彼女の自慢の炎魔法？」ブリエンは再び手綱を引きしめ、馬車の速度を一気に上げた。「そんなに大げさに屋根を爆破する必要があるの？　ただ野獣の群れじゃないか？」

著作権ページ
The poetry with sigh of meteor -Episode-I-Meteorite Fall-
書名：流星詠嘆の詩　第一部　月降る流れ星

Writer／作者
Legacy

原案設計
Legacy

出版
Legacy

校正／プロファイル／編集
Legacy

Twitter：
Legacy -π- @LineageLegacy

絵師：
まるまゝ(MARUMAI)

電子書の出版

２０２４年２月

著作権所有、その全てまたは一部をいかなる形式、いかなる手段によっても、公開配布することを禁じます

流星詠嘆の詩-第一部-月降る流れ星-無料のサンプル閲覧本

1. Start
2. Contents
3. 夜明け
4. 夜明けII
5. ファイアトリック
6. 著作権ページ